ふるさとから学ぶ

学校長　小邑　政明

私は、ふるさとから学んだ三つのことを自分の人生における基本としています。

Ⅰ　勉強は机の上だけでするものではない。

私のふるさとは、映画「君の名は」の舞台となった古川町です。隣の市にある高校までJR(当時は国鉄)で通いました。冬はとても寒いうえに雪が降り積もり通学に苦労しました。駅舎のある1番線から.映画にも出てくる跨線橋を渡り、2番線のホームで列車を待ちます。SLが白い雪の中黒い煙を吐きながら元気に近づいてきます。汽笛は次第に高い音になり、「今日も頑張ろうぜ」と言っているように聞こえます。朝寝坊をして、列車の後姿をホームで見送ることになってしまったときは、汽笛も次第に低音になり消えていきます。近づいてくる物体の発する音は次第に高音になり、逆に遠ざかっていく場合は次第に低音になっていく現象は、後に物理の授業で「音のドップラー効果」という現象であることを学び、勉強は机の上だけで行うものではないということがわかりました。

Ⅱ　コミュニケーションの基本は、相手の立場に立って考え行動することである。

大学受験のときも2番線からSLの激励を受けて受験地である都市に向かいました。激励のおかげで大学にも無事合格でき、田舎者の下宿生活がスタートしました。

大学では、私の日本語が変だと仲間うちの話題になったことがありました。そのきっかけになったのは、自宅から通学している友人の一人が、一人暮らしをしている私を気遣って、パーティーをやるので家に来ないかと誘ってくれたとき、私は「喜んで来るさ」と返事しました。その友人はきょとんとして、「パーティーは僕の家でやるのだよ」と言いました。私が「喜んで行くよ」と応えればよかったのですが、嬉しさのあまりふるさとの言い回しが出てしまいました。パーティーの中でそのことが話題になったとき、別の友人が、私の言った言葉は相手側からみた言い回しで、英語でも使われる表現だと次のような例を出して説明してくれました。

「君が主催するパーティーに喜んで行くよ」を英文にすると、「I will be glad to come to your party.」となり、行くの「go」ではなく、来るの「come」が使われる。これは相手の立場に立って物事を考えるという気持ちの表れで、私の「喜んで来るさ」も同じだと持ち上げてくれました。温かい仲間たちとふるさとの先人の知恵に感謝しました。このことがあって、私は、他人との言動はできるかぎり相手の気持ちを考えることをコミュニケーションの基本としています。

Ⅲ　自分の運命は自分自身が握っている。

ふるさとを離れて今年で半世紀になります。春休みに帰郷した折、観光客の多さに驚かされました。きっと映画の影響もあるのでしょう。まだ雪も多く残っており太陽の光を受けて輝いていました。私は、一人の観光客が「今日のように太陽の日差しが強いと雪も溶けてしまうので残念だね。」と話していたことに違和感をおぼえました。地元の人は生活体験から「雪を溶かすのは、太陽ではなく雪の姿が変わった雨である。」ことを知っています。また、雪解け水は、冬が来れば雪となって戻ってきます。これらのことは、「自分の最大の敵は自分自身であり、最大の味方も自分自身である。」ことを私に教えてくれます。すなわち自分の運命は自分自身が握っていると考えています。

ふるさとは、私にとって大切な先生なのです。

次回は「窓から学ぶ」について書きます。